

二〇一二年度 入学試験問題
一般第一回・帰国児童入試
国語

注 意

- 1 問題は一・二の二題あります。
- 2 試験時間は五〇分です。
- 3 答はすべて解答用紙に記入し、解答用紙だけを提出してください。
- 4 受験番号は算用数字で記入してください。
- 5 声を出して読むはいけません。
- 6 試験場の先生の指示があるまで、問題用紙を開いてはいけません。

— 1 —
次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

夏期休暇が終わったばかりの九月半ば、三日ほど雨が降りつづいた後の晴天は、澄んだ水を思わせて清々しい。風向きが変われば季節もうつろう。しかし、夏の余韻も急には失せず、昼日中の日射しは濃い蔭を落とした。

土曜の放課後、乙彦はいつもの下車駅よりひとつ先で降りた。線路脇に木槿の咲く閑静な駅だが、乗り越しの精算をする窓口は、予想通りの混雑だった。

この月の第二土曜と日曜は、不動尊の境内で古物市がひらかれる。上下線にひとつずつの改札口しかない小さな駅が、この日ばかりはかなりの賑わいだ。精算の順を待つ人は、プラットフォームにまで列を成した。

乙彦はそんなときの要領が悪く、いつのまに最後尾へ押しやられた。乗り越し料金を踏み倒すほどの狡猾さもない。駅舎の屋根をかすめて射し込む陽の角度は意外に低く、乙彦の足もとを通り越して、柱の影を長くのばした。線路を過って、反対側のプラットフォームにまで達している。影が長くなれば日は短い。乙彦は先を急ぐわけでもないのに、気をせかされた。

「これを、使えよ。鈍間。」

プラットフォームと外の土手とをへぐてる垣根で声がして、乙彦の足もとへ切符が落ちた。柱の影に気を取られていて、声の主の姿を見なかった。あわてて辺りを見まわしたが人影はなく、彼は怪訝に思いながら切符をヒロいあげた。確かに有効の切符だ。狐につままれた思いで改札口を抜け、切符を投げて寄越した人物を探した。しかし、不動尊までつく人波は、狭い道幅いっぱい

に広がり、人探しなどできる状況にない。

乙彦は、すっきりしないままに入込みへ吞まれ、不動尊へたどりついた。近隣では名の通った古物市で、常連客も多い。たんに古びた物から骨董まで、瓦落多もあれば掘り出し物もある。焼き栗や駄菓子、立ち喰い蕎麦の屋台まで出て、醬汁と蜜の匂いが往来に充ちた。

とくに古物に興味があるわけではない乙彦が市へ来たのは、道楽ついでに商いまでする兄をひやかすためだ。兄の甲彦は、まだ学生の分際で、この方面の道楽に時と金をツイやしている。家庭教師などで稼いだ小金をつぎ込む一方、

祖父母が面倒がつて手をつけずにいた蔵を漁り、値打ちがあるのかないのか程の知れない古皿や器を持ちだした。

口達者な人である。端正な容貌も味方して、繁盛するらしい。毎度、そこそこ稼いで帰宅する。兄に子ども扱いされるのが癪で、市へは顔を出さずにいた乙彦だが、学期はじめの気楽さもあって、寄り道をした。

『伽藍洞』とふざけた屋号である。持ち運びできる看板を掲げたその舗を乙彦はすぐに見つけたが、兄の姿はなかった。代わりに、従兄の端がいる。北陸の港町に住むはずの彼を、今時分都内で見かけるとは思わなかった。従兄は乙彦を見つけ、毎度、と商人ぶった挨拶をした。

「いつ、来たのさ。ずいぶん突然なんだね。」

「相変わらず鈍くさいヤツだよな。乙彦は。見ちゃいけないや。」

乙彦の問いをはぐらかし、端はいきなりつけつけとものを云ってくる。口ではかなわないと心得る乙彦は、聞こえぬふりで売り物の腕時計の歯車を手にとった。

「小さい旦那、そりや、じかに触んでくださいよ。この手合いはね、指の脂も禁物なんだ。機械が狂っちゃう。函を持って覗いとくれ。静かにね。だけど、売らないってんぢやないですよ。手袋をお貸ししましょう。さ、どうぞ、どうぞ。」

「……なんだい、物売りの口真似して。彦兄さんは何処へ行つたのさ。」

兄の甲彦のことは、彦兄さんと呼んでいる。幼い頃に、舌足らずにカツヒコニイサンと呼ぶのがむづかしく、縮まって彦兄さんとなった。端も同様だ。

「悪いけど、おれは乙彦よりか江戸ッ児弁が巧いよ。なんたって、乙彦は衣紋掛けのことを、いもんかかって云うんだもん。おれが指摘しなけりや、まだそう思いこんでたろう。」

「べつに、どうだっていいぢやないか、そんなこと。」

「良かないよ。やることなすこと、つてのもそうだよ。することなすことつてんだ。ちゃんと覚えとけよ。」

「とつくに承知だよ。」

「そうか。草加、越谷は千住の先ってね、」
「……もう、何云ってんだ、」

端は、昔から人の話の[A]を折る癖が抜けない。いつのまに本題からそれて、訊いた乙彦まで、何の話だかわからなくなる。思わぬところで忍耐を強いられ、乙彦はせっかくの寄り道気分をそがれた。おまけに、今晚も従兄の口に悩まされるのは必至だ。はるばる訪ねて来たのだから、泊まりがけて来たのに相違ない。

一歳違いの従兄弟同士で、端は中学三年、乙彦は二年だ。歳の近いふたりは幼いころから互いを意識して、何かと張り合った。勉強でも運動でも、いつも少しだけ端のほうが勝っている。それがまた、乙彦の癪の種だ。

「何をふてくされてるんだい。切符の札ぐらい云って欲しいもんだね。」

乙彦は、ぽかん、として従兄の顔をながめた。

「……端だったのか、」

「何だよ、今さら。あんまり愚図だから、見ちゃ、いられなくてさ、おれの切符を融通したんだ。ありがたく思えよ。」

「端は、どうやって出たの、」

「よせよ。今どき、切符がなければ改札を出られないなんて、洒落にもなんないや。」

「乗り越し料金は、払うのが当然だよ。」

乙彦は真顔で反論した。

「ああ、これだから、親切の甲斐もない。」

B だ。」

「悪かったね。だけど、頼みもしないのに、そっちが勝手にしたことだろう。そういうのは親切ぢやなくて、お節介って、云うんだよ。だいたい、何だ、盆暮れでもないのにいきなり訪ねてくるなんて……」

調子にのって畳みかけている最中、沈んだ端の表情が目にはいり、乙彦はにわかにも口ごもった。

「この夏休みは、遊びに来なかったぢやないか、」

待ってたのに、と後へつづけそうな眼をして端は不満を云う。わざとらしく

するだけの、簡単な茶を点てた。

「厭だね、煙草も喫まない伊達男ってのは、」

端が擲論した。自分では、平気な顔で喫い差しの煙草を手をしている。中学生の彼が煙草を喫んでも、雑踏の中では見とがめる人もない。目立つほど野暮でもなかった。

汁粉は、とうに平らげている。

「おまけに生下戸だ。これぢや、粋な姐さんは口説けないやね。」

甲彦は傍へ置いた火鉢の鉄瓶に水を差して笑った。

「哥さんの間違いだろ、」

すかさず端がまぜ返した。

「時々は、そういうこともあるね。端もご同輩かい、」

「蛇の道は、くちなわが知るってね。」

「へえ、気の利いた云いまわしを心得てるぢやないか。感心だね、」

「そりゃね、この歳になれば、そのくらいいたしなみってもんさ。だけど、ここへひとり、どんちんかんがあるんだよ。」

端は乙彦をちらッと見て、煙草の灰をわざわざ人の膝へ落とした。乙彦はそれをはらっただけで、文句は云いそびれた。甲彦がひとしきり笑った後で話題を変えたからだ。

「伯父さん、もう発ったんだって。大阪から、」

「身軽なもんだよ。向こうで暮らすつてのに荷物も小さくってさ。息子は、海上の家で面倒見てくれるだろうって、暢気に極めるんだ。」

商社員の伯父に海外赴任の辞令が出たと云う。父独り子独りで、高校受験を控えた息子が同行できない事情は、乙彦だとして察しはついた。

「おれは、彦兄さんの傍に来られて、万々歳なんだけど、……乙彦は」

C ってどこだろうね、」

「どうだかね、」

甲彦は、惚けた顔で弟を見た。乙彦は、兄と従兄が交わす軽妙なやりとり、に気をとられていた。耳新しい情報も多い。従兄の同居話は、本人が指摘したと

顔をそむけ、小鉢の五枚組になったのを見せたいという年配の婦人の相手をした。勉強なさいよ、いやこれ以上は勘弁してください、古い物なの、掘り出し物ですよ、などやりとりをして、結局値引きをせずに売りつけた。

「毎日、部活の練習があったんだよ。秋の大会に備えて、」

乙彦は、客が引き上げるのを見計らい、夏に従兄を訪ねなかった弁解をした。実のところ、暇はあったが気が向かなかった。ふたりで顔を合わせれば、たいした理由もないのに諍いが起こる。それが、乙彦には負担だ。

だいいち端は、甲彦が訪問すればそれで満足のはずである。甲彦はこの夏も例年どおり訪ねたのだから、文句はあるまい。

「何してるんだっけ、部活。バスケ……ってことないな、乙彦は敏捷ぢやないし、バドミントン、卓球、……これもちがうよな。テニス、ハンドボール、」

「合唱だよ。」

一瞬沈黙があり、後は噴き出し笑いだった。乙彦は正直に答えた莫迦さかげんに自分で厭気がさした。端が、こういう性質なのはわかりきっている。彼といっしょにいれば乙彦は、何だか気が休まらない。火かげんのわからない煮物を、鍋をのぞいては具合を見、串を刺したり、火力を塩梅したり、あれこれ骨折ったあげく煮損じる。そんな気分だった。

「お待ちどお。へえ、珍しいな。乙彦も来てたのか、」

甲彦が戻ってきた。似合いの濃紺のセーターを着ている。服には頓着なく、いつだって投げ売りの安物だが、何を着ても様になる容姿の若者だった。汁粉の椀をふたつ盆に載せていたのを、少年たちに配った。

「突っ立つてないで、ここへ坐れよ。」

甲彦は品物を適当に避けて、三人が坐る場処を拵えた。

「彦兄さんの分がないぢやないか。ぼくのは勘定にはいってなかったんだろ、」

乙彦は気兼ねして訊いた。兄弟とはいえ、七つも歳がちがう。日ごろから、何とはなしの遠慮が生じる。

「おれは、いいよ。要するに、一服すりゃいいんだ。」

取り出したのは煙草ではなく、抹茶の罐である。碗に湯をさして茶筌で攪拌

おり、乙彦を心底驚かせた。甲彦は、盃盆の際に親族で話をして極まったことだとつけ加えた。夏じゅう合唱の練習に明け暮れていた乙彦は、そんな気配を微塵も感ずることはなかった。そういえばあの電話が、と思いつた節すらない。

「ま、ともかく仲良くやろうや。おまえたちも同じ学校になるわけだし、」

「えっ、」

乙彦は思わず大声になった。

「なんだよ。えっ、てのは。同じ学校ぢや悪いかい、」

端は不満げな顔をした。

「だって、私学だよ。公立校ぢやないんだから、転校生なんて聞いたことがない。」

「私学だからこそ、融通が利くんだよ。家ぢや、父子四代、あの学校だしね。かたちばかり編入試験を受ければいいのさ。端は向こうで成績が良かったんだし、問題ないよ。」

甲彦の弁は一応筋が通っていた。乙彦はそんなものか、と納得したが、兄と従兄の意気投合ぶりに途惑った。⑦ 軽口を交えたふたりのやりとりが羨ましい。兄の甲彦は、こんな場でこそくだけているが、家ではまったくその無長兄ぶりだ。

演じているというふうではない。愉しみつつ、分別のある兄としてふるまっている。この家でも転勤族の当主は不在が多く、箸のあげさげや、建具のあけたてを、兄が諭し、父より口喧しい。従兄のように馴れ馴れしくふるまうなど、乙彦には真似できない。それでも、ふだんならば何の問題もなく過ごせるものを、端の登場で調子が狂った。

(長野まゆみ「栗樹——カスターニア」)

問一 傍線部「ホ」について。カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記しなさい。

問二 傍線部①について。なぜ「いつもの下車駅よりひとつ先で降りた」のですか。文中から二十字で抜き出しなさい。

問三 傍線部②「狐につままれた思い」とはどのような「思い」ですか。適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 切符のことは気にせず目的地へ急ごうと思っている。
- イ 余計なお節介をされたと感じて不愉快になっている。
- ウ 切符をくれたのがだれなのかいぶかしく思っている。
- エ 思いがけず切符が手に入ったことを喜んでいる。

問四 傍線部③「つけつけと」の意味を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ほがらかに元気よく
- イ 思ったことを遠慮なく
- ウ 相手を不愉快にさせようと
- エ 物事の本質について

問九 傍線部⑥「火かげんのわからない煮物」の説明として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 乙彦としてはどう接していいかわからない端のことを表現している。
- イ 乙彦としては自分のことを話してもうまく通じない端のことを表現している。
- ウ 乙彦にとっては正直に話をする気になれない端のことを表現している。
- エ 乙彦にとっては良いライバルともいえる端のことを表現している。

問十 傍線部⑦について。「羨ましい」と感じる背景にあるのは、甲彦へのどのような意識ですか。それを端的に言い表している箇所を、文中から抜き出しなさい。

問五 空欄 A に当てはまる漢字一字を答えなさい。

問六 傍線部④「本題」とは、ここではどういうことですか、答えなさい。

問七 空欄 B・C に当てはまることわざを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 触らぬ神に祟りなし
- イ 青天の霹靂
- ウ 大山鳴動して鼠一匹
- エ 乗りかかった船
- オ 可愛さ余って憎さ百倍
- カ 骨折り損のくたびれ儲け
- キ 対岸の火事
- ク 寄らば大樹の陰

問八 傍線部⑤「勉強なさいよ」とありますが、ここではどういうことを言っているのですか。具体的に答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「婦人之友」という雑誌で、『東日本大震災特集』の一本として青木玉、青木奈緒の母子が、「闇にさす光」というタイトルで対談をしていた。この二人、幸田露伴、幸田文、青木玉、青木奈緒と四代つづく日本の文豪の直系の家系である。

かつて幸田文は、「崩れ」見てある記」を「婦人之友」に連載した。後に、これは「崩れ」として刊行された。徹底した現場主義で、日本のいたるところで起きつつある地すべり、山くずれ、崖くずれ、崩落現象を見て歩いている現場報告である。彼女がこの仕事をはじめたときは、実に七十二歳。すでに足こしもかなりA なっていたから、山奥の現場に行くときは、しばしば人に背負ってもらったという。

孫娘の青木奈緒が、「崩れ」の現場再訪を依頼されて書いたのが、『動くとき、動くもの』（講談社文庫）。さらにその取材過程で得た材料と二〇〇四年の中越地震（山古志村）を背景に描いた小説が「風はこぶ」（婦人之友）。その連載がちょうど完結するときに起きたのがこのたびの大震災。

「奈緒―地震当日、通りは帰宅を急ぎ、歩く人でいっぱい。うわ、こんなに人がいるんだと、びっくりしました。」

玉「『帰宅難民』という言葉は聞いていたけれど、それが目の前に出てきて、動けないでいる」（闇にさす光）

私は小石川のこの二人の家のすぐ近くに住んでいるので、この辺一帯が帰宅難民であふれたあの日の異様な光景をよく覚えている。

「闇にさす光」とは何か。実は奈緒さんは、中越地震の直後に山古志村に入りボランティアをしたことがある。

「奈緒―倒れて折れた桜の古木から、小さなひこばえが天を指して伸びているのを、中越地震後に入った山古志村で見たのです。光がさす方に向かって伸びようとする姿を、ぜひ書こうと」（同前）

ここに記されているように小説「風はこぶ」では、祖母セツ（実の祖母幸田文をモデルにしたとおぼしき人物）が植えた桜の古木のこととして、このエビ

実は幸田・青木邸のすぐ横の歩道上に、昔から不思議なムクの巨大な老木があつて、その木には、注連縄がかかっている。伝説によると、そのムクの木には、すぐ近くの沢蔵司稲荷に祀られている沢蔵司という江戸時代の学僧のレイが宿っているのだという。この老木、七、八年前から、ついに枯死するのではないかと思われるほど弱っていたが、二、三年前に、誰かが上のほうの枝を斬り落した。斬り口のところから、ひこばえが生えだして、最近では若々しい枝が何本も生まれ育ちはじめ、枯死は完全にまぬがれたようだ。

ひこばえというのは不思議なものだと思って、「ひこばえって何ですか？ 寿命が尽きようとする老木が子孫を残す戦略なんですか」と植物学者に聞いてみた。すると、「いやあ樹木には基本的に寿命なんてないんです。樹齢何百年、何千年の樹木は同一個体が生きてつづけてるんです。水と栄養と太陽光線がキョウキユウされつづければ、樹木は何年でも生きつづけます。ひこばえは、子孫ではなくて、その樹木自身の若芽です。木というのは、すべて、中心部から樹皮の側に向って育っていきますから成長点は、樹皮のすぐ下の形成層というところにあります。そこに生物でいえば幹細胞のような細胞があつて、いつでも新しい細胞を作りつづけているんです。だから幹でも枝でも、そこを切り落せば、そこから若芽が生えてくるんです。普通の木には性がありませんから、同じDNAを持った細胞が増殖（無性生殖）していくだけで、ひこばえであらうと同一個体です」

性がない多くの生物では、ちがう個体かと思っていると、実は同一個体の別のあらわれということがある。そこに思いがけない植物の弱さがある。生物の性があるのかというと、性が多様性を生み、多様な個体を生み出し、それがその種に生物学的な強さを与えるからだというのがいまや定説になっている。

「竹の世界で百年に一度くらい一山数万本の竹が一斉に開花し、花を咲かせ終るとみんな枯死してしまうということが起りますが、あれは、一山数万本の竹が全部地下茎でつながった同一個体だから起る現象です。もし一本一本がちがう個体だったら、一斉に死ぬことはありません。必ず生き残る個体がありま

ソードが感動的にオリ込まれている。

「幹は折れ折れてなお、のびるべき方向を知っていた。なん本もの小さなひこばえが天を目ざして芽吹き、花が終わって自分たちの出番が来るまで、乏しい力をためていた」

このエピソードを用いた理由を奈緒さんは次のように語っている。

「日本人って、みんなで気持ち共有したい、みんな一緒でありたいというところがありますけれど、災害というのは、その『みんな一緒、平均的な』というものを失うこと。日本全国でこの災害を少しづつ分け合ひましよう、分け合えればいいのですが、それができないのが災害だと思います。そういう意味で、いくら言葉を尽くしても尽くし足りないし、その痛みは消えないもの、という気がして。（略）目を向けていくべきなのは、そこから立ち上がろうとする被災者の方々の力、明日に向かっていくこうとする私たちみんなのエネルギーではないでしょうか」

被災者の中に生まれる、光をめざすひこばえのような心情にこそBの灯があるということだ。

大震災以後しばらく、TVから商業コマーシャルがいつせいに消え、その代りうるさいほどに「日本は強い国」「みんな一緒」「絶対乗りこえられる」を強調するACジャパンの公共コマーシャルが流された。あの連呼を聞いてみると、私のような世代は、戦争時代の「国民精神総動員運動」を思い出してしまふ。何か危ない時代に突入しつつあるような気がして、逆にこの道を行くと国家的苦難を絶対乗りこえられないのではないかと気がしてきてしまふ。

さて、ひこばえは、樹木の切りカブのところから新しく生えてくる若芽のことだ。ひこばえは曾孫のことである。古木であろうと、それが切り倒されるなど不慮の死をとげそうになると、ひこばえを出して子孫を残そうとするといわれ

ひこばえが光を求めて伸びていこうとする姿に、奈緒さんは突然の大災害に遭ってへたりこむ被災者たちの中から必ず生まれてくるにちがいない若い世代の可能性を重ね合わせ、そこに希望を見たのだろう。

②「みんな一緒」の世界はこういう弱さを内包しているのだ。

幸田文は「崩れ」で、人間はみな心の中にいつ芽になるか、どう育つかわからない種をいっばいかえこんでいる存在だと書き、そこに人間の価値を見ていた。

危機の時代だからこそ、「みんな一緒」となえるのは、日本を「強い国」にする道ではないと思う。画一化の方向性は共倒れの方向性でもあるからだ。「みんな一緒」よりひとりひとり「みんなちがう」小さなひこばえとなつて、天を目ざして芽ぶくことが大切だと幸田露伴のひこばえが教えてくれたような気がする。

（立花 隆「ひこばえ」）

問一 傍線部イのホのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄Aに当てはまる語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア おぼつかなく イ うたがわしく
ウ ふくぶくしく エ だらしく

問三 傍線部①について。青木奈緒は「ひこばえ」を通じてどのようなことを描き出そうとしていますか。適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 光に向かって伸びようとする姿に重なる、みんな一緒に同じ方向を向いて協力しようとする態度。
- イ 古木が子孫を残そうとするように、つらい経験を生き残ったものたちで伝えていくことの大切さ。
- ウ 決して消えない痛みをかかえながら、災害を乗り越えていこうとする人々の力強さ。
- エ 災害の痛みを分け合うことはできないが、せめて若い世代には未来をたくそうとする意志。

問四 空欄 B に当てはまる語を文中から抜き出さない。

問五 傍線部②「『みんな一緒に』の世界」の説明として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア みんなの力で理想的な世界になることもあるが、常に共倒れの危険もつきまとうている。
- イ 復興のためにみんなが力を合わせてこそ、真の力強さが生まれてくる。
- ウ 戦争時代を思わせはするが、震災から復興するためにはぜひとも必要である。
- エ みんなが同じ方向を向くことは、みんなが同時に倒れてしまう可能性を持っている。

問六 この文章で取り上げられている「ひこばえ」の説明として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ひこばえとはもともと植物が子孫を残す手段のことをいうのだが、筆者はすぐれた才能を持った子孫のことを比喩的にひこばえと呼んでいる。
- イ ひこばえとは植物学的には同一個体の芽ふきのことだが、筆者はこれをあえて多様性のある個としてとらえ、それが生まれ出てくる可能性に期待している。
- ウ ひこばえとは植物の子孫のことと思いがちだが、性がない多くの植物の場合それは同一個体なのであって、筆者は同一性から生まれる多様性に希望を見出している。
- エ ひこばえとは老木が子孫を残そうとして芽を出すことだが、そこに災害から復興するために子孫を残し若い世代を育てたいという筆者の願いを重ね合わせている。
- オ ひこばえとは同じ植物から生まれる多様な個であって、そのように人間もどんなときも多様性を忘れず、未来にむけて進むべきだと筆者は主張している。

問七 本文からは次の一文が省かれています。どこに補うのが適当ですか。その直後の文のはじめの五字を抜き出さない。

それがひこばえです。

得 点

問十	問九	問八	問七	問六
			B C	

—

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七
イ						
り						
ロ						
し						
ハ						
ニ						
ホ						